

試験時間

90分

注意事項 1 解答用紙に受験番号と氏名の記入を忘れないこと。

2 問題用紙、下書用紙は解答用紙とともに机上において退出すること。持ち帰ってはいけない。

次の文章を読んで、問いに答えなさい。

研修医諸君、唐突な質問だが、医者とはなんだろうか。もうちょっと質問を具体的にすれば、医者がやるべき仕事とはなんなのだろう。有名なものとしては、次に掲げる言葉が上げられる。このオリジナルはヒョクワテスマで通るとい説もあるが、一般的には19世紀に結核療養所を開設したニューヨーク出身の医師、エドワード・トルドー(1848-1915)の格言として知られている。

To cure sometimes, to relieve often, to comfort always.
「治す」ことは時々できる、「和らげる」ことはしばしばできる、「慰める」ことは常にできる。もちろん、その時でいいことにベストを尽くすのが仕事である、という趣旨であるの言うまでもない。

(中略)

癌の診療をやっていると、何度か「悪い知らせを伝える」という状況に遭遇する。癌の診断や再発の告知以上に、最近我々を最も悩ませるのは、積極的治療の打ち切りを告げねばならない時である。

癌だと言われても、治らないと念を押されても、そしてそのことを理解していても、患者は死ぬつもりなんて毛頭ない。そして我々も、なんだかんだと「和らげる」もしくは擬似「治す」治療をやっていく。しかしある時、もつこれ以上はどうしても積極的治療をやるべきではない、という状況に陥るのである。すべての不確実性、つまり、「やってみなければ分からない」ということを計算に入れても、それでももう無理だ」という病態に直面する。

チエスで使われる用語で、これをツークツヴァンク(Zugzwang)・ドイツ語というそうだ。どういう手を指しても、局面は悪化する。本当は一手パスしたいのだけれど、チエスではそうもいかない。ただ癌診療では「何もしないで、様子を見る」という「一手パス」は、できないことはない。そんな時は往々にしてこれがベストの方策である。

しかしこれは、状況を改善させる(可能性をも)道筋を断念する、つまり「治す」方へ向かうこと自体を放棄することである。この方向転換は医者も辛い、患者にとってはもっと受け入れ難い。「治らないことは最初から分かっていたはずだ。その上で今までいろいろやってきたのに、この期に及んで撤退しろというのか? 我々はよく、「座して死を待てる」というのかと患者から詰め寄られる。

「ここにおいて、医者も患者も、「治す」つもりでいることが完全にできなくなる。「治す」幻想が消失したその時には、「和らげる」こともままならなくなってしまっていることが多い。そして、実は我々はそれまでずっと、「慰める」ことも医者の仕事だ、とはあまり考えてなかったことに気がつく。いまさら「これも大事だ」とか持ち出しても、いかにもとってつけたようではないか。

(中略)

患者は中年の女性で、当初は積極的治療の中止に強く抵抗し、息子たちのためにも生き続けなければならないのだと主張する。それに対してバックマン先生は、息子さんたちもこの場合、ソシヤルワーカーにも相談して、社会的環境を整えたと説明する。この際に、「これで社会的状況については手助けすることができる。これは医学的状況をかえることはできないが、しかし……」と、できないことはできないと、はっきり言いながら、できることをやっていくのだと強調している。

その他、緩和ケアスタッフとも相談するし、「希望があれば誰かセカンドオピニオンのために同僚を連れてきてもいい」と「あれやこれやをやっていく」のだと話す。

何より、「これで終わりではないのだ」ということを繰り返し明言する。患者は、積極的治療の終了イコールあとは死ぬだけ、みたいに思いがちなのだが、そうではない、まだやることは一杯あるのだと。

(中略)

繰り返すが、「何もできなくなった時」には、本当に何もやるべきことがないのではない。しかし、患者にとっては非常な衝撃であり、文字通り「死」とも向かい合う時になるのは間違いないだろう。

わが異友の一人、京都で研究倫理を教えるK子先生は、「そういう時こそ医者が必要なのだ」と断言する。我々が考える自分の仕事、自分の役割、自分の能力、そういうものがすべて尽きた時こそ、「医者」の出番である、というのだ。K子先生は医者ではないが、だからこそ却って医者の本質が見えるであろう。

そうした時、「自分の役割は終わった、自分は何もできなくなった」と「正直に白状」してしまい、「ごめんなさい。さようなら」と君は戦線を離脱しようというのか。そして本当に「何もしてやらなくなった」と絶望に囚われる患者を後に残すのか。そんな、敵前逃亡するような医者が、信用されると思うか。瘦れ我慢でもなんでも、「まだやることはある。私も戦線に残る」と言い張るバックマン先生の強弁こそが、「医者」のありべき姿勢を示すのではないか。

(里見清一著「医者」と患者のコミュニケーション論(新潮社))

問一 この文章に適切なタイトルを二十字以内でつけなさい。

問二 著者が医療のツークツヴァンクにおいて重要と考えていることを二百字以内で説明しなさい。

問三 患者が医療のツークツヴァンクに陥ったときに、あなただったらどのように対応するか、六百字以内で述べなさい。